
事典の cross-reference 性

玉井 暲

(大阪大学助教授)

「事典」を読む楽しさとはいったい何だろうか。それは、cross-reference 性といったものと深く関わっているのではないか。ある一つの項目を引くと、そこで得られた知識をきっかけに、さらに新しい情報を求めて次々と別の項目を引きたくなり、こうして関心の触手が四方八方に伸びていって、そこに大きな網状の世界が形づくられるのだ。私たちの『ワイルド事典』の場合でいうと、ある項目を読むと、ワイルドという存在のもつ多様な相——家族、友人、同時代人から、関わりのある文学的、文化的、社会的、歴史的、風俗的な出来事・現象にいたるまで——はいうまでもなく、ワイルドを核としてその周辺に広がる「世紀末」の多面・多層が浮かび上がることとなる。

この網状をなす関心の世界は、項目同士の相互参照によって形成されるだけでなく、各項目に付けられた図版の果す役割にも大きいものがある。つまり活字と映像との相互参照性である。だから、編集に携わった方々はいうまでもなく、各執筆者も図版の選択に腐心されたのではないか。たとえば、イズムに関わる事項には、どんな図版がふさわしいのか。ある作家の肖像写真を選ぶにしても、若い頃のものを取るか、あるいは晩年のものを選ぶか、あるいは記された内容に関わりのある写真を探すべきか、少なからず頭を悩ます。また、画家による肖像画しか残っていない場合、できれば「世紀末」に関わった同時代の画家によるものを選びたい。このような点で、私たちの事典は、自負してよいように思う。ピアボウムの戯画、ホイッスラーの絵画、シメオン・ソロモンの肖像画、ピアズレーの挿し絵、ロートレックの絵画、チャールズ・リケッツのデザイン、『パンチ』の戯画、サローニの写真などの映像は、活字の世界とみごとに相互参照のシンフォニーを奏でていよう。
